

罪悪感が集団作業における個人の成績に与える影響

——努力への意欲も含めた分析——

HU WEI

Latane et al. (1979)は集団に属する人が個人で課題を遂行するときよりも集団で課題を行う場合に、ひとりあたりの作業量が低減する現象、つまり社会的な手抜きが存在を見出した。また社会的な手抜きを抑制する要因を探索するために、多くの研究がなされてきた。一方、集団で作業をするときには、ケラー効果などの社会的促進の現象も見られる。課題の難易度や成員への信頼性など、集団パフォーマンスと関わる様々な外在的な要因が検討されてきたが、集団メンバーの1人1人の感情的な要因についての研究はあまり見られていない。

しかし、人は集団の一員である前に個人としては様々な感情に影響されていて、その各種の感情が後の行動や動機づけに影響を及ぼすことが確認されている(Isen, 1999)。その多数の感情の中でも、特に後悔や罪悪感などのネガティブな感情は、失敗した場面に喚起されやすい性質を持っていて(Roese, 2005)、さらにその後の行動や動機づけに促進的な影響を及ぼすことが認められている(大谷・中谷, 2011)。また、罪悪感を抱くことで努力意欲が喚起され、次の行動を促進することが考えられる。

本実験は集団で作業をする際に、個人(自分)の社会的な手抜きの生起の確認、手抜きをしたことの影響で自分のパフォーマンスが他のメンバーより劣っている場合の罪悪感生起と努力意欲生起の確認、および罪悪感と努力意欲が後のパフォーマンスへ及ぼす影響について検討することを目的とした。また、個人と他のメンバーのパフォーマンスの間の差の大小が罪悪感と努力意欲に影響するのかについても検討した。一人の参加者に個人課題、集団課題1回目、集団課題2回目、計3回の3分間課題を行わせた。操作条件として成績のフィードバックを行ったが、能力の差が大きい条件を遠距離条件とし、能力の差が小さい条件を近距離条件とし、さらに成績のフィードバックを行わない条件を統制条件とした。能力の差が大きいほど罪悪感と努力意欲が少ないという仮説と、罪悪感と努力意欲が大きいほど後のパフォーマンスが向上するという仮説を立てた。

結果としては、本実験において社会的な手抜きが生じなかったが、成績のフィードバックがある場合には罪悪感が喚起され、近距離条件の場合の罪悪感は遠距離条件に比べて高い傾向が見られ、罪悪感と努力意欲には有意な相関が見られた。努力意欲に関して、成績のフィードバックがある場合には努力意欲が喚起され、近距離条件の場合の努力意欲は遠距離条件に比べて有意に高かった。また、近距離条件において集団課題2回目は集団課題1回目よりも有意にパフォーマンスが良かったのに対して、遠距離条件においては集団課題2回目と集団課題1回目の間に有意な差が認められなかった。成績の操作条件とパフォーマンスの関係について罪悪感と努力意欲を媒介変数とした媒介分析を行った結果、いずれの媒介モデルも成立しなかった。

今回の実験では自分の成績がわずかに他のメンバーより劣っていることで集団全体に悪い結果を招いたときには罪悪感と努力意欲が生じて後のパフォーマンスが高まるが、成績の差が大きい場合には罪悪感と努力意欲があまり生起せず、その後のパフォーマンスも高まらないということが示唆された。(社会心理学)